

「自由殺し liberticide」の告発者
——パーシー・ビッシュ・シェリーは『神学・政治論』を
どう受け止めたか——

吉 田 量 彦

東京国際大学論叢 人文・社会学研究 第7号 抜刷
2022年（令和4年）3月20日

「自由殺し liberticide」の告発者

——パーシー・ビッシュ・シェリーは『神学・政治論』を
どう受け止めたか——¹⁾

吉 田 量 彦

The Complainant Against Liberticide **How did *Tractatus Theologico-politicus* Interest the** **English Poet Percy Bysshe Shelley?**

YOSHIDA, Kazuhiko

Abstract²⁾

It is known that in the latter 1810s, Percy Bysshe Shelley was busy translating *Tractatus theologico-politicus* (1670), a then-controversial work by Baruch Spinoza (1632–1677), into English. What made him do it? The obvious assumption, that the so-called pantheism controversy and the subsequent Spinoza renaissance since the 1780s in Germany had aroused his interest in Spinoza, turns out to be less plausible on closer inspection. This is because this dispute caused lively discussions about Spinoza and his thoughts not only in the German-speaking countries, but also in other Western European countries. From the beginning, it revolved exclusively around Spinoza's metaphysical worldview, which is mainly found in the first two parts of his main philosophical work, *Ethica* (1677). In contrast, Spinoza's anthropological, ethical-practical, and, above all, theological-political thoughts were almost unmentioned according to a tacit agreement among the participants in the discussion. Since Shelley's translation is considered lost to this day, the author is concentrating on two attempts: First, he tries to chronically reconstruct the more detailed processes of Percy Bysshe Shelley's translation work from the few materials left behind (including letters and entries in Mary Wollstonecraft Shelley's diary). It turns out that, in spite of several obstacles, Percy was by and large regularly and diligently engaged in the translation and Mary provided him with constant support in various ways. Second, the author tries to point out an unmistakable content-related feature in the *Tractatus* that could have strongly motivated Shelley to pursue this translation: In this work, Spinoza

makes a clear plea for freedom of opinion, speech, and freedom of the press (*libertas philosophandi*) and thereby systematically and uncompromisingly criticizes a maneuver of repression that was common across Europe at the time; Shelley vigorously refers to this in his poems several times as *liberticide*.

Keywords: *liberticide*, Percy Bysshe Shelley, Mary Shelley, Baruch Spinoza, *Tractatus theologico-politicus*

目 次

1. はじめに——問題の所在
2. 汎神論論争とは何だったのか
3. なぜ『神学・政治論』は汎神論論争の話題に上らなかったのか
4. なぜ『神学・政治論』がシェリーを引きつけたのか
5. おわりに——メアリー・シェリーの証言から

1. はじめに——問題の所在

2020年の2月下旬、新型コロナウイルス関連の記事で新聞各紙が徐々ににぎわい始めていた頃、日本シェリー研究センターの佐々木真理氏（武蔵野大学）から筆者の下に一通のメールが届いた。その年の暮れに開催される2020年度年次総会のシンポジウムに、筆者をパネリストの一人として招きたいというのである。

日本シェリー研究センターは、イギリス・ロマン派の詩人パーシー・ビッシュ・シェリー（Percy Bysshe Shelley: 1792-1822）と、その妻で『フランケンシュタイン』の著者メアリー・ウルストンクラフト・シェリー（Mary Wollstonecraft Shelley: 1797-1851）を研究・顕彰する学術団体だという。正直に言ってこの突然の申し出にはとても驚いた。筆者は英語・英文学を研究対象としたことがこれまでの人生の中でただの一度もなく、詩人のシェリーについては今から30数年前、大学一年次に履修した英文学の授業で、一編のソネットを読まれた記憶しかない。メアリー・シェリーにいたっては『フランケンシュタイン』さえ読んでいない有様である。英文学の学会に招かれる心当たりなど微塵もない。

その後佐々木氏から詳しい理由をうかがって、ようやく「ああ、そういうことか」と腑に落ちた。なんでもシェリー（以下、特に断らない限りパーシー・ビッシュを指すものとする）は、その短い生涯の晩年、具体的には1810年代の後半から1820年代にかけて、あの『神学・政治論 *Tractatus theologico-politicus*』の英訳を試みていたというのである。

「あの」と言われても困るかもしれないが、『神学・政治論』とは、17世紀のオランダに生きた哲学者スピノザ（Benedictus de Spinoza: 1632-1677）が1670年に匿名で刊行した著作である。ホップズ『リヴァイアサン』やロック『統治二論』といった同じ17世紀の古典と比べ、一般的な知名度こそ高くはないものの、近代の宗教・政治哲学の歩みを考える上では両者に劣らない重要性を秘めた作品であり、日本語にも2度訳されている。最初の邦訳は1944年に岩波文庫から刊行されたもので、訳文を手がけたのは、のちにスピノザの著作のほとんどを単独で邦訳することになる畠中尚志（1899-1980）であった。³⁾ その畠中訳からちょうど70年後の2014年に、光文社古典新訳文庫から2度目の邦訳が刊行された。この時翻訳にあたったのが吉田量彦（1971-）、と他人事のよ

うに書いたが、つまり筆者である。⁴⁾ そういうつながりで呼ばれたらしい。

招かれた経緯は理解できたが、お話をうかがううちに別の疑問が生じてきた。シェリーの目に留まったのは、なぜ『エチカ』ではなく『神学・政治論』だったのか、という疑問である。これも多少の説明が必要だろう。

佐々木氏のご教示によると、シェリーは『神学・政治論』の英訳にとりかかる数年前の1813年1月、「スピノザの著作集を注文」しているという。⁵⁾ 筆者は当初ごく単純に、1802年から1803年にかけて隣国ドイツのイェナで刊行されたスピノザ著作集（以下、仮に編者の名前をとり「パウルス版」と呼んでおく）⁶⁾ を注文したのだろうと推理し、シンポジウムの梗概にもそう書いた（が、実際には少しだけ違っていた）。⁷⁾ 当時もっとも入手しやすかったと思われるのは、刊行時期から見ても収録作品の網羅性から見ても、間違いなくこのパウルス版だからである。

パウルス版スピノザ著作集の刊行は、画期的な出来事であった。これ以前にスピノザの著作に触れようとすれば、ひととはとっくの昔に絶版希少本となり、しかもその大部分が発禁処分を食らっている、一連の著作群を個別に探して買い集めるほかなかったからである。具体的には何よりもまず、スピノザの没した1677年の年末にラテン語・オランダ語訳2種類の版で刊行され、翌年直ちに禁書となった『遺稿集 *Opera Posthuma/ Nagelate Schriften*』を見つけてくる必要がある。しかしこれは文字通りの遺稿集、つまりスピノザが死去した1677年2月21日の時点で未刊だった著作を集めた書物であるため、たとえば1670年に匿名とはいえ一度刊行され、そして1674年7月に禁書となった『神学・政治論』は含まれていない。含まれていないということは、これはこれで別に見つけてこなければ入手できないのである。

よほどの興味関心と、よほどの忍耐力を併せ持った人でなければ、普通そういう骨の折れる文献収集は試みないし、仮に試みたとしても何しろ相手は名うての発禁本だから、運よく見つけられるとは限らない。この結果、18世紀も後半に差しかかる頃には、スピノザの思想を原典にあたって正確に理解しうる境遇にある人は、ヨーロッパ全域で考えても希少となっていたようである。ひととはたとえば、ベール『歴史批評辞典』（初版1696）の長文ながら色々と不備の目立つ項目「スピノザ」などに頼りつつ、この人物の思想らしきものについて想像力を働かせる他なかった。パウルス版スピノザ著作集、つまり世界初のスピノザ全集は、十分に信頼できない二次資料によってスピノザの人物像および思想が奇怪にゆがんだ形で伝えられていき、そして伝えられた先でさらに信頼できない二次資料を生み出していくという、この厄介な悪循環を断ち切るための橋頭堡の役割を果たすことになったのである。

このパウルス版著作集の刊行は、さらにそれに先立つ1780年代以降のドイツ語圏で、いわゆる汎神論論争を通じ、スピノザ哲学に対する再注目、再評価の機運が高まったことの結果に他ならない。汎神論論争は当時のドイツ語圏の文学や思想、わけてもドイツ・ロマン派のそれに大きな影響を及ぼしており、そのドイツ・ロマン派と英語圏のロマン派の間にもどうやら濃密な摂取・影響関係があったようなので、シェリーが『神学・政治論』に目を付けたのも、一見すると当然の成り行きのように見えるかもしれない。

ところが、残念ながら話はそう簡単にはまとまらない。というのも後述するように、汎神論論争でスピノザに寄せられるようになった関心は哲学上の主著『エチカ』の、しかもかなり限られた論題に集中するばかりで、『神学・政治論』が話題に上ることは皆無に近かったからである。『神学・政治論』がパウルス版に収録されたのは、可能な限り網羅的であろうとする編集方針（cf. “*Opera supersunt omnia*” !）の結果にすぎず、この著作に当時のドイツ語圏で特に論争上の関心が集まっていたからというわけではない。同じことを反対から表現するなら、仮にシェリーのスピノザへ

の関心が汎神論論争の何らかの波及効果によってもたらされたとすれば、その関心が最初に向かうのは普通に考えれば『エチカ』であり、『神学・政治論』ではなかったはずなのだ。

もちろん、シェリーがもう少し生きながらえていたら、その関心は結局のところ『エチカ』にも向けられていたかもしれない。『神学・政治論』を片付けた彼が、今度は『エチカ』の翻訳に乗り出すことは、『エチカ』の英訳も当時存在していなかったことを考え合わせるなら、⁸⁾可能性としては十分ありえただろう。しかしそうした想像以上に重んじなければならないのは、生き急いでいたとしか言いようがないほど鮮烈で短い人生の中で、彼が最初（で最後）に取り組んだスピノザの著作が『エチカ』ではなく『神学・政治論』であったという、厳然たる事実である。そこには明らかに（どの程度自覚的だったかはともかく）シェリー自身の選択が働いている。それでは改めて問わなければならないが、シェリーにそのような選択を促した要因は、一体どのようなものだったのだろうか。

この報告では、まず汎神論論争の概略を紹介した後（第2節）、当時のドイツ語圏の教養市民層を取り巻いていた政治的・社会的環境を、同時代の仏語圏および英語圏のそれと対比しつつ、紙幅の許す限りで明らかにしてみたい（第3節）。私見では、『神学・政治論』を何らかの政治哲学的関心のもとに取り上げることができるような条件が、前者ではまったく整っていなかったのに対し、後者ではまがりなりにも整っていたように思われる。さらに本報告では、そうした条件のみならず、『神学・政治論』で展開されたスピノザの思想そのものに、シェリーが特に引き付けられたと思われる内在的特徴が見出されないかどうか検討してみたい（第4節）。結論から言えば、筆者は、そうした特徴は確かに見出されると考えている。シェリーの印象的な言葉を借りるなら、『神学・政治論』は、西洋近代哲学史上これ以上ないくらい徹底した形で「自由殺しliberticide」の愚かさを解き明かした著作だからである。

2. 汎神論論争とは何だったのか

いわゆる汎神論論争 Pantheismusstreit を見渡しにくくしている最大の原因は、論争が進むにつれて関係者が増殖していくことである。したがって、この論争の大枠を理解するには、まず無駄に多い登場人物を削減し、その発端を作った3人、つまりレッシング (Gotthold Ephraim Lessing: 1729-1781)、メンデルスゾーン (Moses Mendelssohn: 1729-1786)、ヤコービ (Friedrich Heinrich Jacobi: 1743-1819) まで戻って考えてみるのが一番手っ取り早い。

ただし3人まで戻るということは、結局は1人に戻ることを意味する。というのも、今あげた3人のうちレッシングは、論争のきっかけを作った人物ではあるものの、論争開始時点ですでに死んでいる（というか、彼が亡くなったことがすべての発端である）し、メンデルスゾーンも論争開始後ほどなく死ぬからである。論争の中心人物は、したがって、最後に残ったヤコービということになる。論争の中心となったテキスト『スピノザの学説に関する書簡』（1785）も、前半部の所々にメンデルスゾーンの書簡からの写しをふくむものの、大部分は（冒頭で復元されている生前のレッシングとヤコービの対話もふくめて）ヤコービの筆から成っている。⁹⁾

レッシングが亡くなってからしばらくして、ヤコービは自他ともに認めるレッシングの無二の親友メンデルスゾーンと文通を始め、生前のレッシングがスピノザとその思想に多大な共感を示していたことを明かす。¹⁰⁾ これに対し、同じユダヤ人思想家として「スピノザ主義者あるいは汎神論者 Spinozist oder Pantheist」というレッテルの危険性を知りすぎるほど知っていたメンデルスゾーンは、レッシングの放言癖を強調することで事態の無害化を図ろうとする。こうして、よ

くも悪くも空気を読まず、真実を明らかにしようと望むヤコービと、よくも悪くも空気に敏感で、頑ななまでに亡き友の名誉(?)を守ろうとするメンデルスゾーンの間、「スピノザ主義者であるとはどういうことか」をめぐる、微妙にかみ合わないやり取りが始まるのである。

当然ながら、書簡を往復させるうち、話題はスピノザの哲学の中身におよぶ。メンデルスゾーンのスピノザ理解は、少なくともヤコービの目線からすると、かなり粗雑な水準にとどまっていた。その認識のすり合わせを図るべく、ヤコービは自らスピノザの「学説」を、しかも2度にわたって要約してみせる。¹¹⁾

やがて両者それぞれの体調不良も重なり、文通が滞り始めたため、ヤコービはこれまでのメンデルスゾーンとのやり取りを「公表しようという考え」を抱くようになる。¹²⁾ メンデルスゾーンはメンデルスゾーンで同じことを考えており、ヤコービに先立って刊行した著作(『朝の時間 Morgenstunden』1785年8月)の中で自らの立場を明らかにしたため、ヤコービも翌月刊行に踏み切る。これが『スピノザの学説に関する書簡』(第1版1785年9月、正式名称は『モーゼス・メンデルスゾーン氏に宛てたいくつかの書簡におけるスピノザの学説について Über die Lehre des Spinoza in Briefen an den Herrn Moses Mendelssohn』だが、以下『スピノザ書簡』と略称)である。

両著作の刊行によって、論争はいわば野に放たれる。これに伴い、論点も論争開始当初の話題、つまり「レッシングはどのような意味でスピノザ主義者であったか・なかったか」という(ヤコービはともかく、メンデルスゾーンにとっては文字通りの死活問題となった)話題を離れ、同時代のドイツ語圏の知識人たちを巻き込んだ、より普遍性の高い話題へと移行していくことになる。それは「そもそもスピノザの哲学とはどのような哲学なのか」という話題であり、さらに一歩進めるなら「理性を拠り所とする哲学は、本当に、突き詰めていくと必然的にスピノザと同じ結論、つまりヤコービがそう呼ぶところの無神論に行き着くのか」という話題である。¹³⁾

既に述べた通り、ヤコービは『スピノザ書簡』にまとめられたスピノザの学説の丹念な(ただし後述するように、取り上げる論題に偏向が見られる)要約と、その内容に対する警戒感あふれるコメントにより、¹⁴⁾ 論争の中心人物となる。ヤコービから見ると、スピノザの哲学は超越的人格神を否定し、神を自然のメカニズムに内在=埋没させる「汎神論」あるいは「無神論」ということになるが、しかしそれで話は終わらない。彼はさらに進んで、こうしたスピノザの哲学の「論駁」が不可能であることを強調する。理性の思弁・立証能力に依拠するあらゆる哲学は、それが首尾一貫したものであればあるほど、望んでいようとしまいとスピノザの堅牢な思弁を後追的に確認するほかに、結局はスピノザと同じ境地に至ることになる。ヤコービにとってスピノザの哲学は究極の哲学であり、その並外れた吸引力から逃れるには、自らの生の究極の支えとなるものを思弁的な論証・反証の対象とならない確信 Glaubeに求めるといふ、彼の言う非哲学 Unphilosophieの立場に身を置くしかないとされる。¹⁵⁾

しかし汎神論論争に関与した人の多くは、ヤコービのこうした警告よりも、彼が要約的に紹介したスピノザの哲学そのものに関心を向けた。たとえばドイツ・ロマン主義の重要な先駆者の一人とされるヘルダー(Johann Gottfried Herder: 1744-1803)は、無神論どころか、現実世界の万物に神の活力を見出す「神すなわち自然 Deus sive/seu Natura」の世界観をスピノザの哲学から学んだと考え、自著の中で積極的にスピノザの顕彰を試みた。¹⁶⁾ ヘルダーから一時期大きな影響を受けたゲーテ(Johann Wolfgang von Goethe: 1749-1832)も、おおむねこの路線でスピノザへの傾倒を示していると言える。¹⁷⁾ こうして、それまで「ひとびとからいつでも死んだ犬のように語られて」¹⁸⁾ いたとされるスピノザと、その思想に対する評価は、ドイツ語圏の論壇では1780年代を境にして大きく塗り替えられることになったのである。

3. なぜ『神学・政治論』は汎神論論争の話題に上らなかったのか

前節では、いわゆる汎神論論争の推移とともに、スピノザとその思想らしきものが、ドイツ語圏で曲がりなりにも受容されていく過程を確認してきた。「思想らしきもの」「曲がりなりにも」という、二重にぼやけた言い方をしたのは理由がある。第1節でも述べたように、実はそれは、スピノザの遺したいくつかの著作の中でも、ほぼ『エチカ』に限られた受容だったからである。それも『エチカ』で展開されたスピノザの思想全体に満遍なく関心が寄せられたわけではなく、汎神論論争で盛んに論じられたのは、ほぼ『エチカ』第1部の形而上学的世界観をめぐる話題に限られていた。

スピノザが自ら「エチカ」と名付けた以上、¹⁹⁾『エチカ』は当然最終的には倫理学（エチカ）、つまり人間の生き方に関する哲学的考察に向かうはずであるし、『エチカ』を頭から読んでいけば分かるように、実際向かっている。にもかかわらず、汎神論論争は、そのこの話題にほぼ全くと言っていいほど踏み込まない。妙な言い方になってしまうが、それは『エチカ』を倫理学（エチカ）扱いすることなく進められた、その点では非常に特異な論争だったのである。

こうした偏向のきっかけは、『スピノザ書簡』でヤコービが提示した「要約」の中に既に見られる。前述の通り、ヤコービはこの著作で、スピノザの「学説」の要約的叙述を「第一の叙述」「第二の叙述」の2度にわたって試みているが、『エチカ』第3部以後の内容を示唆していると明確に判別できる記述は、「第一の叙述」の中でコナートゥス（神＝実体の様態としての個物をもつ、自らの存在に固執しようとする力）に言及した箇所以外に見当たらない。²⁰⁾

ヤコービはこの他にも、本人にどれだけ自覚があったかは分からないが、議論の方向性をあらかじめ誘導するような記述を残している。たとえば『スピノザ書簡』刊行の動機を「いかなる点において私がスピノザの味方をしたのかを知ってもらうことが、また議論されたことは、ひたすら思弁哲学に対する思弁哲学、より正しく言えば、純粋な形而上学に対する純粋な形而上学であったということ [を知ってもらうこと] が私にとってきわめて重要でした」と説明している箇所がある。²¹⁾ これは明らかに、何かに対して予防線を張った書き方である。ヤコービのスピノザ論が、仮に「思弁哲学に対する思弁哲学」「純粋な形而上学に対する純粋な形而上学」をはみ出るようなものと世間に思われたら、言い換えれば「思弁哲学」「純粋な形而上学」以外の所で「スピノザの味方をした」ものだと世間に思われたら、一体何がどう困るというのだろうか。

『エチカ』でさえこのような選択的受容に甘んじていた事情を考え合わせるなら、汎神論論争で『エチカ』以外のスピノザの著作、特に『神学・政治論』がほとんど言及の対象とならなかったのも、さほど不思議ではないかもしれない。自覚の程度に個人差こそあれ、最終的には論争に関わった誰もが、少なくとも暗黙裡には、『エチカ』をつついて倫理学（エチカ）を出すのを恐れていたのと同じくらい『エチカ』をつついて『神学・政治論』を出すのを恐れていたのである。

逆に言えば、『神学・政治論』という著作自体は意外と広く知られていたと推察される。少なくとも、スピノザが匿名で刊行したそういう表題の著作が存在するという事実は、汎神論論争の関係者たちには広く知られていた。例えばメンデルスゾーンは、接触を図ってきたヤコービへの最初の返信の中で、「スピノザの体系といっても、どの体系のことを言っているのか。『神学・政治論』のものか、『デカルトの哲学原理』のものか、ローデウエイク・マイエルがスピノザの死後、スピノザの名において広めた『『エチカ』を含む『遺稿集』の] 体系なのか」と問い返している。²²⁾ そしてそこに一種のはぐらかしを読み取ったヤコービも「あなたがなぜ『遺稿集』に対抗するため『神

学・政治論』を何としても持ち出そうとするのか理解できません。『神学・政治論』がスピノザの学問体系に関して含んでいるものと彼の遺された作品 [= 『遺稿集』特に『エチカ』で展開された思想]は完全に一致します²³⁾と返しているから、間違いなく『神学・政治論』の内容を、それも『エチカ』の思想との連続性を断言できる程度には把握していたはずである。²⁴⁾そしてそれにもかかわらず、メンデルスゾーンもヤコービも、『神学・政治論』とそこで展開された思想に積極的に言及しようとはしていない。

そうした汎神論論争の登場人物たちの中で、例外的に少しだけ、しかも肯定的な文脈で『神学・政治論』に言及しているのはヘルダーである。彼は『神』の導入部で、自分自身の思想を仮託した登場人物の一人に「いまこの時代にスピノザの『神学・政治論』に注解をつけて出版してくれたらよいのですがね」と語らせ、しかも「寛容という点では、私たちの国家の本性は、スピノザがかつて [[『神学・政治論』後半部]でおおかたの憎悪を招きながら指しめした道以外にはほとんど進みようがありません」という、スピノザの宗教・政治思想にかなり肩入れした記述すら残している。²⁵⁾しかし本論がいきいよ始めると、ヘルダー(の思想を代弁する人物)は『神学・政治論』を「初期のたんなる時務的な著作」という扱いで『エチカ』の解釈から切り離してしまい、それ以上ふれようとしない。スピノザのもう一冊の政治哲学的著作『政治論 *Tractatus politicus*』(1677, 岩波文庫の邦訳名は『国家論])に至っては、他の著作と一からげに「断片」の一言で切り捨てられている。²⁶⁾論旨が右往左往した挙句、更新の途切れたブログのように断絶する『知性改善論 *Tractatus de intellectus emendatione*』(初期著作なのは間違いないが、成立年代については諸説ある)をそう呼ぶのは仕方ないとしても、当初の執筆構想にあったほとんどの内容を書ききり、²⁷⁾後はまとめにかかるという所でスピノザの命が尽きた絶筆『政治論』を「断片」として黙殺してしまうのは、この著作に対するかなり不当な扱いと言うほかない。

このように、1780年代に汎神論論争を通じて芽生えたスピノザへの関心は、スピノザの形而上学的世界観への関心に尽きており、スピノザの思想の他の側面、とりわけ『神学・政治論』に代表される政治思想への関心には直接つながっていなかった。それは決して、論者たちがスピノザの政治思想に実際に無関心だったという意味ではない。関心は芽生えていても、うかつに本格的な論争の対象として取り上げることが忌避される、そういう空気のようなものが当時のドイツ語圏にはまだ根強く残っていたという意味である。

17世紀後半という、周辺諸国と比べても比較的早い時期に流布し始め、その後のドイツ語圏にしつこく残り続けるスピノザ憎悪の淵源となった著作は、実は『エチカ』ではなくむしろ『神学・政治論』であったという指摘が行われている。²⁸⁾そう言われてみると、『神学・政治論』刊行のわずか数ヶ月後(1670年春)に自らの講義でこの著作を取り上げ、伝わっている限りでは欧州全域で最も早い公の場での批判を行ってみせたのも、ドイツ人であった。ライプニッツの大学時代の指導教員としても知られている、ライプツィヒ大学のヤーコプ・トマジウス(Jakob Thomasius: 1622-1684)である。²⁹⁾

啓蒙主義を旗印に掲げた思想家たちが、当初ヨーロッパ諸国のほぼ全域で過酷な迫害を経験しなければならなかったのは周知のことだが、ドイツ語圏ではそうした迫害が18世紀中盤から後半という、いわゆる後期啓蒙 *Spätaufklärung* の時期に入ってもまだ起きていたことが記録されている。もちろんこの時期には、迫害といっても「火あぶりにされるわけではなく、投獄も比較的稀になっていた」が、中には逸脱者と見なされ失業し、どこに転居しても嫌がらせの放火や窃盗に繰り返し痛めつけられ、貧困のうちに窮死を余儀なくされた人物もいたという。³⁰⁾ こうしたごく近い時代になっても起きていた迫害のことは、汎神論論争の関係者たちにも集合記憶として共

有されていたと思われる。スピノザの思想を受容する上で『神学・政治論』をいわばまたぎ越そうとするこうした傾向は、続く1790年代、フランス革命に触発されてドイツ語圏の知識人たちがにわか政治づき始めた後も（むしろ政治づき始めたからこそ、かもしれないが）基本的に変わらない。³¹⁾

同時代の啓蒙主義の思想家でも、たとえばフランスのヴォルテール（Voltaire: 1694-1778）などがそれなりの非難を浴びながらも諸国の宮廷やサロンで一定の地位を確立し、特にプロイセン王フリードリヒ2世（1712-1786）などの「啓蒙専制君主」たちと気持ち悪いくらい親しく交流するに至っていたのに対し、そのフリードリヒのお膝元（もちろん、彼がドイツ語圏全域を政治的に支配していたわけではないが）のドイツ語圏では、どうしてここまで啓蒙主義が「やられ放題」だったのだろうか。もちろん一枚岩ではない、さまざまな要因がそこには絡んでいたと思われるが、中でもエリアス（Norbert Elias: 1897-1990）を始めとするヨーロッパ文化史方面の研究者たちに繰り返し指摘されているのは、汎神論論争の主役でもあった18世紀ドイツ語圏の知識人たちが、諸外国、特にフランスと比べて、社会の中間層としては極めて脆弱な地位に甘んじていたという事実である。³²⁾「民衆より上位のエリートだが、宮廷貴族の目線からは二級の人間」であった彼らには、³³⁾ゲーテのような例外中の例外を除き、政治的決定にほんのわずかでも関与しうような地位に上昇する機会はほぼ完全に閉ざされていたという。こうした中間層としてのドイツ語圏の知識階層は、その上層とも下層とも隔絶され、しかも神聖ローマ帝国内の大小さまざまな領邦国家群のあちこちに散在し、孤立していたという意味では「例えばこれに対応するフランスの知識階層と比べて、またフランスとドイツのいわば中間的位置を占めていたと思われるイギリスの知識階層と比べてさえ、より純粹に、そしてはるかに特異的に中間層的であった」とされる。³⁴⁾つまり早くから国内の集権化によって絶対王制が確立され、地方領主としての実権を奪われた貴族たちが唯一の政治的・文化的中心としてのパリの宮廷に集まるようになり、「唯一絶対の王」と「それ以外の有象無象」という形で身分上の境界線が引き直されつつあったフランスなどの方が、知識階層の上層身分との接触や交流ははるかに容易になっていたというのである。³⁵⁾これに加えて、ドイツ語圏の支配者層に根強かったフランスの宮廷文化への猛烈な傾倒と、これに対応したドイツ語圏の文化全般への猛烈な蔑視も、ドイツ語圏における知識人たちの社会的上昇や政治参加をさらに困難なものにしていたという。³⁶⁾

4. なぜ『神学・政治論』がシェリーを引きつけたのか

これまで明らかにしてきたように、シェリーが『神学・政治論』に関心を寄せることになった経緯に、汎神論論争の影響はほぼ全くないと考えてよい。だとするとシェリーを『神学・政治論』に引きつけた原因は、この著作に盛り込まれたスピノザの思想そのものにあったと考えるしかないさそうである。³⁷⁾では、具体的にスピノザの何が彼を引きつけたのだろうか。

英語圏の文学や思想に疎いまま無駄に年齢を重ねてしまった筆者は、今回の依頼を受けた時点で、シェリーの詩をたった一つしか知らなかった。冒頭で述べた英文学の授業で教わったソネット「1819年のイングランド」がそれである。1819年8月にマンチェスターで起きた大規模な民衆弾圧事件をうたった、いくつかの詩の中の一編だという。改めて読み返してみると、大学の一年次、18歳の秋に初めて読んだ時と同じく、何かやたらと怒り狂った詩という印象を受ける。³⁸⁾

England in 1819

An old, mad, blind, despised, and dying king,—
 Princes, the dregs of their dull race, who flow
 Through public scorn, —mud from a muddy spring,—
 Rulers who neither see, nor feel, nor know,
 But leech-like to their fainting country cling,
 Till they drop, blind in blood, without a blow,—
 A people starved and stabbed in the untilled field,—
An army which liberticide and prey
 Makes as a two-edged sword to all who wield,—
 Golden and sanguine laws which tempt and slay;
 Religion Christless, Godless, a book sealed;
 A Senate, —Time's worst statute, unrepealed,—
 Are graves from which a glorious Phantom may
 Burst, to illumine our tempestuous day.

1819年のイングランド

老いぼれて、狂っていて、盲目で、だれからも見下された死にかけの国王—
 王子たち、奴らは愚鈍な血筋の残りかす、みんなの嘲りのただ中を
 流れていく—泥の泉から湧き出る泥のような連中—
 支配者たち、奴らは見ようとも感じようとも知ろうともせず、
 みずからの弱った祖国にただ蛭のようにしがみつき、
 やがて叩かれもしないのに、血に酔いつぶれて、ぼろりと落ちる—
 民衆は飢え、耕されることのない大地に縫い留められ—
自由殺しと略奪を行う軍隊は
 それを振り回す誰にとっても両刃の剣となる—
 金と血の色をおびたさまざまな法律が、ひとを惑わしたり殺したり、
 キリストも神もない宗教、封印されて開けない本、
 老いぼれ議会一時が遺した最悪のしきたり、一向に廃されない—
 これらはみな墓なのだ—やがてここから、ひとつの輝かしい亡霊が
 はじけ出るだろう—ぼくらの荒れ狂った時代を照らすために。

(原文イタリック、訳文下線部ともに強調 吉田)

この中に「自由殺しと略奪を行う軍隊 An army which [makes] liberticide and prey」という一節がある。³⁹⁾「自由殺し liberticide」という珍しい単語は、当初シェリーの造語かと思ったし、実際そう書いてある文献も存在するのだが、⁴⁰⁾ オックスフォード英語辞典（オンライン版）によると「18世紀後半、フランス語から入ってきた言葉」だという。ただ、どうやらフランス語での用例もフランス革命以前には遡れないようなので、まだ新語に近い言葉であったことは間違いない。⁴¹⁾

スピノザの『神学・政治論』を開くと、シェリーほどいきり立った口調ではないにせよ、この著作もまたある種の「自由殺し」を告発する書物としての性格を濃厚に宿していることが分かるだろう。あえて「読むと」ではなく「開くと」としたのは、本文を読み始めるまでもなく、ある程度注意深い読者（シェリーも恐らくそうであったと思われる）なら、タイトルページを開いた瞬間にそれに気づかされるはずだからである。

俗に『神学・政治論』と称されるこの書物に、スピノザが付けた正式名称は、実はもう少し長い。そして『エチカ』を「倫理学（エチカ）」と名付けた一件からも明らかのように、スピノザは（少なくとも自分で名付けたことが判明している著作に関しては）看板上に嘘偽りを書かない人であった。言い換えれば、著作の中で自分が一番論じたいことを、最初から一切包み隠さず明らかにしておくタイプの書き手であった。⁴²⁾

神学・政治論

本書は、

哲学する自由を認めても道徳心や国の平和は損なわれないどころではなく、むしろこの自由を踏みにじれば国の平和や道徳心も必ず損なわれてしまう、ということを示したさまざまな論考からできている⁴³⁾

以前にも別稿で指摘したが、⁴⁴⁾ 哲学する自由（*libertas philosophandi*：ここでは思想・言論・表現の自由という理解で大過ない）を擁護するために、ここでスピノザはかなり「攻めた」論法を採用している。「哲学する自由を認めても道徳心や国の平和は損なわれない」と言えば、哲学する自由は道徳心や治安を傷つけないもの、つまり国家や社会にとって無害なものだから認めてほしいという論法になるし、実際スピノザはそれも否定しない。しかしここで彼が最終的に採用するのは「むしろこの自由を踏みにじれば国の平和や道徳心も必ず損なわれてしまう」という、それよりもはるかに強い主張である。綱紀肅正（「道徳心」の涵養）や治安維持（「国の平和」の維持）を名目にして自由を弾圧するなら、弾圧者が（どれだけ本気かはともかく、少なくとも名目上は）まさに守ろうとしているものこそが自由と諸共に台無しにされるという、当初の目論見とは真逆の結果が生じるという。そして『神学・政治論』本文は、まさにその理由を示す「さまざまな論考からできている」。このタイトルページだけ取り上げてみても、読み手に対するかなり親切な工夫が凝らしてあるのは明らかである。

ある著作を外から持ちかけられた仕事として翻訳するのではなく、翻訳するもしないも読み手の自主的な判断に委ねられている場合、読んでいるどの時点で翻訳したい／したくない気持ちが固まるかは、もちろん一口では言えないさまざまな条件に左右される。しかし、もし通読しなくても大意を確認できるような工夫がその著作に凝らされている場合、それは読み手に速やかな決断を促す決め手になるだろう。これも当然ながら想像の域を出ないが、シェリーは恐らく『神学・政治論』をそう先まで読み進めないうちに、既に翻訳を決意していたのではないだろうか。というのも、スピノザはタイトルページに限らず、ページをめくってから、内容の速やかな理解を助けるためのさまざまな仕掛けを本文中に施しているからである。紙幅の都合上、ここではそのような仕掛けの具体例を、二つに絞って指摘しておく。

第一に指摘したいのは、この著作の序文が果たしている重要な役割である。いわゆる哲学書の序文には、本文を先に通読かつ熟読していないと内容がさっぱり理解できない、何のためにつ

つけたのか分からないようなものも少なくないのだが、『神学・政治論』の序文は、そうしたものと明らかに異なった性格を付与されている。結論を先取りしておく、この序文は、恐らくかなり意図的に構成された『神学・政治論』のダイジェストなのである。

序文は内容的に前半と後半に分けられる。前半（1-7節）は『神学・政治論』全体の緩やかな導入部であり、序文の序文とでもいうべき箇所である。そこでは不安や恐怖からひとの心に迷信が生まれ、そうした迷信の移ろいやすさを補うために複雑怪奇な宗教儀礼が生まれ、そうした宗教を統治に利用する君主が現れ、さらにそうした統治に不都合な存在として、自由にものを考える人たちが迫害されるという、スピノザの問題意識の根幹部分が流れるように提示されていく。そして後半（8-16節）では、『神学・政治論』全20章の内容が、ほぼ章立ての順序通りで要約的に紹介されていく。共通の主題に費やされた一連の章が一まとめに紹介されることはあっても、紹介を省かれる章は一つもない。しかもこの部分は、その冒頭（8節）近くに既に取り上げたタイトルページとほぼ完全に重なる文章が置かれ、⁴⁵⁾ その結び（16節末尾）となる文章も、(文頭の「わたしが以下に記すことは」が「わたしがこの論考の中で書いたことは」に変わることを除き) 本文最終章の結びの文章（第20章18節末尾）と完全に一致する。⁴⁶⁾ スピノザはこのように、序文そのものをかなり周到に、いわばミニチュア版『神学・政治論』に仕上げているのである。

第二に指摘しておきたいのは、全20章それぞれに、各章で取り上げられる主題を詳細に示した長めのサブタイトルが付けられていることである。こうした工夫自体は時代的にそう珍しいものではないが、これがあるとないのでは、特に内容確認を急いでいる場合の効率的理解に格段の違いが出てくる。これらのサブタイトルは、いわば手で張られたリンクのようなものであり、読み手は序文で全体の流れを一度頭に入れておきさえすれば、その後は各章のサブタイトルを手がかりに、興味のある話題に一直線に「飛ぶ」ことが可能となるからである。さらにスピノザは、サブタイトルだけでは説明不足と思ったのか、少なからぬ章の冒頭近くでもその章で展開される内容の先取りの要約に努めているのだが、これについては割愛する。

5. おわりに——メアリー・シェリーの証言から

メアリー・ウルストンクラフト・シェリー（以下、パーシー・ビッシュと区別するためメアリーとする）の日記には、シェリーが時に集中的に、時に何年ものブランクを挟みつつ、1817年10月から4年余りにわたって『神学・政治論』英訳に取り組んでいたことが記録されている。⁴⁷⁾ 1820年3月には翻訳作業を進めつつ、『神学・政治論』と密接な影響関係にあるホブズ『リヴァイアサン』を同時並行的に読み進めるといふ離れ業さえ見せている。⁴⁸⁾

1821年11月15日の記述「S [=シェリーを指す。以下同じ]、エドワードと一緒にスピノザの翻訳を進める」を最後に、翻訳作業への言及は途絶える。日記の編纂者は「この時翻訳作業が完結した completed」と断定し、この時からおよそ10ヶ月後（1822年9月29日）のメアリーの手紙にある記述「わたしはシェリーの完璧なスピノザ『神学・政治論』の翻訳 Shelley's perfect translation を所持しています」を傍証として挙げているが、⁴⁹⁾ この「完璧な perfect」は翻訳作業が「完了した」という意味にも、訳文の水準に「非の打ちどころがない」という意味にも解することができるので、シェリーの生前に全訳が完成していたかどうかは結局不透明なままである。

この最後の記述に顔を出しているエドワードとは、それから約8ヶ月後、嵐の海でシェリーと一緒に命を落とすエドワード・ウィリアムス (Edward Williams: 1793-1822) のことだが、そのウィリアムスの日記（1821年11月11日）によると、シェリーは脱稿の暁には訳者として自らの名を公

にし、しかも翻訳にいわば箔をつけるため、スピノザの略伝を書き下ろして訳者序文がわりに巻頭に付すつもりでいたという。⁵⁰⁾ どうやら単なる手慰みの翻訳ではなく、最初から出版する気だったらしい。

メアリーの日記の記述だけを頼りに、彼女自身の翻訳作業への貢献度や貢献内容を正確に見積もることは、容易ではない。少なくとも、作業の初期段階で部分的に口述筆記を担当していたらしいのは、「Sの口述に基づいてスピノザの訳文を書き留める」という記述が残っていることから明らかと思われる。⁵¹⁾ さらに1820年代に入ってから、「Sと一緒にスピノザを訳す」とか、シェリーへの言及なしに「スピノザを訳す」といった記述も見られるようになるため、⁵²⁾ ここを素直に読む限り、メアリーが翻訳の進行過程で単なる筆記役以上の役割をこなすようになっていた可能性も否定しきれない。さらに仮定の積み上げになってしまうが、仮に訳稿がシェリーの難船死の時点で完成に達していなかったとすると、それを曲がりなりにも「完璧な翻訳」と言えるような状態までメアリーが補筆していたという推測も不可能ではないだろう。もちろん、彼女のラテン語力がどの程度のものであったのか知るすべが（少なくとも現時点での筆者には）ない以上、上述したことはみな、単なる可能性の指摘の域を出るものではない。

しかし、『神学・政治論』の翻訳作業そのものへの貢献度は容易に見積もりがたくても、内容の理解に関してはその限りではない。たとえそれに対する理解や共感の度合いが二人の間で完全には重なっていなかったとしても、18世紀末のドイツ語圏ではまだ公の言論空間で取り上げることさえ憚られていたこの著作の内容を、シェリーの翻訳作業に協力する過程で、メアリーもまた若い頭脳で柔軟に吸収していったのは間違いのないと思われる。

周知のように、メアリーはシェリーの没後、きわめて積極的に彼の遺稿の整理・編纂・出版を試みている。⁵³⁾ しかし『神学・政治論』訳稿については、前述の手紙の続きの部分にも「わたし[メアリー]に代わって、これ[訳稿]をどこかの書籍商に売りつけていただくことはできませんでしょうか—たとえばロングマンとかそういうところに」とあるように、⁵⁴⁾ 出版を持ちかけはしたようだがどうやら成功しなかったらしく、訳稿も発見されないまま今日に至っている。もし今もどこかに埋もれていて、ジョージ・エリオット訳『エチカ』のように、いつか発見されて日の目を見る時が来るなら、一研究者としてこれほど喜ばしいことはない。

* 本稿には、以下の競争的研究資金による研究成果が含まれる。

- ・日本学術振興会・科学研究費助成事業（科研費）基盤研究（C）「レリギオとレギオの狭間：セファラディーム・アシュケナジーム・ミズラヒーム」（課題番号：17K02033）

注

- 1) 本稿は去る2020年12月5日、日本シェリー研究センター第29回大会（Zoomによる遠隔開催）シンポジウムで発表された同名の講演原稿に、加筆修正を施したものである。
- 2) 以下のアブストラクトは、『日本シェリー研究センター年報』第29号（2021年7月）p. 3初出の英文要旨を、同会の了承のもとに再録したものである。この場を借りて感謝申し上げる。
- 3) スピノザ（畠中尚志訳）『神学・政治論』岩波文庫、1944年、全2巻。
- 4) スピノザ（吉田彦彦訳）『神学・政治論』光文社古典新訳文庫、2014年、全2巻。
- 5) Feldman, Paula R. and Scott-Kilvert, Diana (ed.): *The Journals of Mary Shelley 1814-1844*. Oxford (Oxford University Press), 1987. Vol.1, p. 182.
- 6) Paulus, H.E.G. (Hrsg.): *Benedicti de Spinoza Opera quae supersunt omnia*. Iena, 1802-1803.
- 7) その後念のため、シェリーがスピノザ著作集を注文している書簡の原文を確認したところ、シェリーは

「スピノザは神学・政治論と遺稿集で、少なくとも現在のところは十分足りるでしょう (The Tractatus Theologico-Politicus & the Opera Posthuma of Spinoza will fully suffice, at least for the present.)」という書き方をしていた (Jones, Frederick L. (ed.): *The Letters of Percy Bysshe Shelley*. Oxford (Oxford University Press), 1964. Vol. 1, p. 347-348). 『神学・政治論』と『遺稿集』が入手できればもう「十分」で、これ以外のスピノザの著作 (『デカルトの哲学原理』) は不要という意味だろう。ここを素直に読む限り、どうやらシェリーも注文を受けた書籍商もパウルス版の存在を知らなかったのか、あるいはパウルス版が (その可能性は低いと思うが) 既に品切れになっていたのか、古い版の『神学・政治論』を求めたらしい。ただしこの後の展開を示す書簡が残っていないため、彼が最終的に入手できた版がどれであったかは結局不明である。

- 8) シェリーの時代から少し下った1850年代に、メアリー＝アン・エヴァンズ (Mary Ann Evans: 1819-1880) という英国人女性が『エチカ』の初の英訳を試みている。しかし1856年に完成をみたこの訳は、出版交渉を買って出た人物と出版社の意見が合わず、結局お蔵入りになってしまう。この英訳『エチカ』が遂に刊行され注目を集めたのは、完成から実に164年後の2020年年初のことである。ジョージ・エリオット George Eliot 名義で19世紀英文学史に輝く数々の小説を遺した彼女が亡くなって、既に140年が経過していた。このエヴァンズもしくはエリオット訳が「管見する限り、『エチカ』の初めての英訳」だという記述については、Carlisle, Clair (ed.): *Spinoza's Ethics. Translated by George Eliot*. Princeton (Princeton University Press), 2020. p. 1 を参照。なお、奇しくもこれとほぼ同時に刊行されたフランス大学出版局版スピノザ著作集第4巻『エチカ』によると、現在判明している限りで最初の『エチカ』英訳が刊行されたのは1870年のことである (cf. *Spinoza Œuvres. Tome IV. Ethica/Éthique*. Paris (Presses Universitaires de France), 2020. p. 656).
- 9) ヤコービ『スピノザの学説に関する書簡』は、田中光 (1948-) による初の日本語訳が先年刊行された (知泉書館, 2018年)。
- 10) 正確には、いわばハブ空想的な役割の仲介者エリーゼ・ライマールス (Elise Reimarus: 1735-1805) を間に挟んだ間接的な文通だったのだが、話が面倒になるため省略する。
- 11) ヤコービ『スピノザの学説に関する書簡』邦訳 p. 130-151 (スピノザの学説の第一の叙述), p. 152-180 (スピノザの学説の第二の叙述)。
- 12) 同, p. 170。
- 13) cf. Beiser, Frederick C.: *The Fate of Reason*. Cambridge (Harvard University Press), 1987. p.47-48. パイザー (Frederick Beiser: 1949-) は以上3つの論点をそれぞれ1. 外殻 outer shell, 2. 内層 inner layer, 3. 隠された内なる核 hidden inner core と呼び、汎神論論争が当時引き起こした衝撃を理解するには (1および2に遮られて見えにくい) 特に3の論点を念頭に置くことが欠かせないと指摘している。
- 14) ヤコービ『スピノザの学説に関する書簡』邦訳 p. 181-207。
- 15) ともすれば忘れられがちだが、ヤコービのこうした『エチカ』の賛嘆者・擁護者としての側面を強調した解釈としては、例えば Sandkaulen, Birgit: *Jacobis Spinoza und Antispinoza*. In: dies.: *Jacobis Philosophie. Über den Widerspruch zwischen System und Freiheit*. Hamburg (Felix Meiner), 2019. S. 15-31. (u.a. S.19-26) を参照。この論文の元になった2012年11月4日の大阪大学での講演原稿は、ビルギット・ザントカウレン (下田和宣訳) 「ヤコービのスピノザとアンチ・スピノザ」として『スピノザーナ』第13号 (2012) p. 41-61 に訳出されている。
- 16) 例えばヘルダー『神——スピノザをめぐる対話』(初版1787, 第2版1800) を参照 (吉田達訳, 法政大学出版会, 2018)。ただしヘルダーはスピノザの神に「善意」を読み込むという明らかな誤読を犯しており、ヤコービが『スピノザ書簡』第2版以降に付した付録 (第4および第5付録, 邦訳 p. 259-276) の中でも (やんわりと、ではあるが) 容赦なく批判されている。
- 17) スピノザからゲーテが受けた思想的影響については、ゲーテ自身のテキストから確認できることを丹念に読み解いた平尾昌宏「ゲーテ・スピノザ・スピノザ主義——誰が『神即自然』を語ったのか」『モルフォロギア』第35号 (2013年), p. 2-28 を参照。詳細は別稿で論じたので割愛するが (吉田量彦「超越者のいない世界の倫理と倫理学」ゲーテ自然科学の集い2020年度総会 (Zoomによる遠隔開催) シンポジウム原稿, 2020年11月7日講演, 『モルフォロギア』第43号 (2021年) に加筆修正の上掲載予定), 平尾の指摘によると、ゲーテが「神すなわち自然」を明確に語ったテキストは存在せず、スピノザから

- 直接受けた影響関係がテキストから確認できるのは、むしろ『エチカ』後半部で重要性を増す「直観知 *scientia intuitiva*」の思想であるという。
- 18) ヤコービがレッスングの発言として『スピノザ書簡』に記録した言葉（邦訳p. 81. ただし文脈に合うよう独自に訳出）。実態をどれだけ反映しているかはともかく、汎神論論争以前のスピノザの扱いを象徴的に表した有名な言い回しだが、正確な典拠を挙げずに引用されることが多いため、出典が『スピノザ書簡』の、しかもレッスングの発言の間接記録であることは、ドイツ語圏でも意外と知られていないようである。Vgl. Liessmann, Konrad Paul: *Der tote Hund*. In: Waibel, Violetta L. (Hrsg.): *Affektenlehre und amor Dei intellectualis. Die Rezeption Spinozas im Deutschen Idealismus, in der Frühromantik und in der Gegenwart*. Hamburg (Felix Meiner Verlag), 2012. S. 9-12.
 - 19) 書簡23（1665年3月、書簡番号はゲプハルト版スピノザ著作集（Gebhardt, Carl (Hrsg.): *Spinoza Opera*. Heidelberg (Carl Winter), 1924-1925）に準拠）にある「わたしのエチカ *mea Ethica*」という表現から、最終的な完成形態に至る10年前からスピノザ自身が「エチカ」という書名を決めていたことがうかがえる。
 - 20) 『スピノザの学説に関する書簡』邦訳p. 140-141.
 - 21) 『スピノザの学説に関する書簡』邦訳p. 184（強調は原文、[]は吉田の補完、以下同様）。
 - 22) 『スピノザの学説に関する書簡』邦訳p. 61. 煩瑣になるから本文では断然なかったが、これはハブ役のリマールスにあてた間接的な返信である。
 - 23) 同, p. 100.
 - 24) 以下のヘルダーにも見られるように、『神学・政治論』は同時代の党派的要請から生まれた「臨時の仕事」に過ぎず、『エチカ』とは思想的に連続していない、という理解（というか無理解）は20世紀に入っても無くならなかった。それを考え合わせると、ヤコービのこうしたスピノザ理解は時代を大きく先取りした卓見といえる。例えばカール・シュミット（Carl Schmitt: 1888-1985）のスピノザ解釈は、こうした無理解が最終的に一番非生産的な結果をもたらした典型例と思われるが、これについては吉田量彦「非政治的ロマン主義の源か、政治的決断主義の内なる敵か——戦間期カール・シュミットのスピノザ理解とその空白」（『モルフオロギア』第41号、2019年、p. 64-89）を参照。
 - 25) 『神』邦訳 p. 10.
 - 26) 『神』邦訳 p. 24.
 - 27) 書簡84（もとは『政治論』冒頭に収録）で執筆構想と、この時点（死の数ヶ月前と思われる）での進捗状況が報告されている。
 - 28) Vgl. „Wichtig war die Suche.“ (Interview mit Martin Mulsow.) In: Salzwedel, Johannes (Hrsg.): *Die Aufklärung. Das Drama der Vernunft vom 18. Jahrhundert bis heute*. München (Deutsche Verlags-Anstalt), 2017. S.49-57. S.52. und Beiser, Frederick C.: *The Fate of Reason*. p.49-50.
 - 29) 吉田量彦「訳者解説」『神学・政治論』光文社文庫、2014、下巻p. 370-371を参照。
 - 30) Vgl. „Wichtig war die Suche.“ S. 53-55. なお、ムルゾー（Martin Mulsow: 1959-）は投獄は「比較的稀になっていた」と述べているが、中には理神論Deismusの嫌疑で18世紀後半に12年間にわたり投獄された人物（Georg Schade: 1712-1795）などもいたことを付加している（S. 52-53）。この人物については Mulsow, Martin: Schade, Georg. In: *Neue Deutsche Biographie* 22 (2005), S. 494-495も参照。
 - 31) たとえば *The Fate of Reason* でスピノザ主義および汎神論論争の詳細な紹介に努めたバイザーも、これに続く時代、いわばドイツ語圏における政治の季節を取り上げた続編的著作（Beiser, Frederick C.: *Enlightenment, Revolution, and Romanticism. The Genesis of Modern German Political Thought, 1790-1800*. Cambridge (Harvard University Press), 1992. (杉田孝夫訳『啓蒙と政治』法政大学出版局, 2010)）ではスピノザに一度も言及しない。
 - 32) Vgl. Elias, Norbert: *Über den Prozess der Zivilisation. Soziogenetische und psychogenetische Untersuchungen*. Erweiterte Ausgabe. Frankfurt am Main (Suhrkamp), 1997. Bd.1. S. 98-124.
 - 33) *Ibid.* S.109.
 - 34) *Ibid.* S.113.
 - 35) *Ibid.* S. 111-112, S. 121-122.
 - 36) *Ibid.* S. 100-103. ここに収められたフリードリヒ2世自身の文章（ちなみに、とても読みやすい稚拙なフ

- ランス語で書かれている)を読むと、例えば18世紀後半のドイツ語圏で開花を見たさまざまな文学運動に対し、この王がいかに無知・無関心・無理解であったか分かる。こうしたフランス語・フランス宮廷文化崇拜およびドイツ語・ドイツ民衆文化蔑視がフリードリヒに限らず、ドイツ語圏の支配階層全般に幅広く共有されていたことについては、ベーン『ドイツ18世紀の文化と社会』三修社、1984(原著1922)、第1章(p.1-81)を参照。
- 37) 誰かがシェリーに『神学・政治論』を読むよう勧めた可能性は決して低くないが、少なくとも彼の書簡からその誰かを探し出すことは困難であった。
- 38) 以下の原文は、あえて、18歳の吉田が初めて読んだ新井明『英詩鑑賞入門』研究者出版、1986、p.53-58のテキストに準拠する。
- 39) 新井上掲書でも、アルヴィ宮本なほ子(編)『対訳 シェリー詩集』岩波文庫、2013、p.134でもこうなっているが、オックスフォード版シェリー選集(Leader, Zachary and O'Neill, Michael (ed.): *Percy Bysshe Shelley. The Major Works*. Oxford (Oxford University Press), 2003. p.446)に収録されたヴァージョンでは“An army *whom* *liberticide* and *prey*/Makes as…”である(強調 吉田)。これだと副文内は*liberticide* and *prey*を(まとめて三人称単数扱いで)主語にせざるをえないので、訳文は「自由殺しと略奪が、それを振り回す誰にとっても両刃の剣となって、その軍隊を作り上げている」となる。厳密にはどちらの読みを優先するべきなのか判断に困るが、どちらを選んでも本稿の主旨に大きな影響は出ないと思われるため、ここでは訳文の作りやすさを考えて*which*を採用しておく。なお、新井はテキストとしては*which*を採用しつつ、別稿の*whom*に配慮して、この*which*を目的格として解釈している(上掲書p.55)。
- 40) 例えば上述のオックスフォード版シェリー選集の該当箇所の訳注には、はっきりと「シェリーの造語 *coinage*」とある(p.774)。ただしこれ以上の説明はない。
- 41) Oxford English Dictionary (<https://www.oed.com/>) 2020年11月21日参照。ちなみにオンライン版で自動表示される用例に偶然出てきたのだが、シェリーは2年後の長詩「アドネイアス *Adonais*」(1821)でもこの言葉を一度使っている(第4連)。
- 42) レオ・シュトラウス(Leo Strauss: 1899-1973)が有名にした、スピノザは迫害を逃れるために本心を巧みに行間に隠しているというテーゼ(cf. Strauss, Leo: *Persecution and the Art of Writing*. Chicago (Chicago University Press), 1952)は、書き方の工夫に関する個別的な指摘としてはともかく、解釈の大枠に関する指摘としては的を外している。スピノザはむしろ、本心を隠そうとしても隠し切れないからこそ『神学・政治論』を匿名で刊行したし、本心が好意的な読み手だけでなく悪意ある読み手にも容易に届いてしまうからこそ、この著作がオランダ語に訳され、潜在的な迫害者に一層届きやすくなることを警戒したのである(書簡44)。
- 43) 『神学・政治論』邦訳(以下光文社版を用いる)上巻p.25参照。原文はこうなっている(改行箇所の表記は省略)。“TRACTATUS THEOLOGICO POLITICUS Continens Dissertationes aliquot, quibus ostenditur libertatem philosophandi non tantum salva pietate et reipublicae pace posse concedi, sed eandem nisi cum pace reipublicae ipsaque pietate tolli non posse.”
- 44) 『神学・政治論』「訳者まえがき」上巻p.21-24参照。
- 45) 「実はこの自由というものは、それを認めても道徳心や国の平和は損なわれぬ、というだけではない。むしろそれどころか、もしも自由が踏みにじられたら、国の平和も道徳心も必ず損なわれてしまうのである。わたしがこの論考の中で証明したかったのは、何よりもまずこのことなのだ」
- 46) 「わたしが以下に記すことは、ひとつ残らず、わが祖国の至高の権力の持ち主たちの検証と判断に喜んで委ねたい。つまり、もしわたしが言うことの何かが祖国の法律に反しているか、またはみんなの安全の妨げになると判断された場合、それは言わなかったこととしていただきたい。わたしも人間だから、誤ることもあると自覚している。ただそう簡単に誤らないための細心の配慮は重ねてきたし、また特に、何を書くのであれ、祖国の法律や道徳心やよき習わしと完全に対応するよう配慮してきたつもりである」
- 47) *The Journals of Mary Shelley*. Vol.1. p. 182-383.
- 48) *Ibid.* p. 312-313.
- 49) *Ibid.* p. 383.

- 50) *Ibid.*
- 51) *Ibid.* p. 182.
- 52) *Ibid.* p. 306.
- 53) シェリー没後の遺稿の扱いに関する要約的記述としては、例えば上掲『対訳 シェリー詩集』p. 347-355を参照.
- 54) *The Journals of Mary Shelley*. Vol. 1. p. 383.